
兵士と見る

能勢恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兵士と見ろ

【コード】

N0040H

【作者名】

能勢恭介

【あらすじ】

「冷たい戦争」と呼ばれた1980年代を過ぎ、大国・日本が向かう先とは、いったいどこか。かつて世界三大海軍と呼ばれた帝国海軍の偉容を、勤勉ながらも愚直、ときに統帥権を振りかざして猛進した帝国陸軍の姿を、プロペラからジェットへと移ろう時期、陸軍から「分家」した帝国空軍の勇姿を、私たち国民はどのような視点で見るとすべきなのか。「大東亜の警察」としての任務に、日本は疲れているのか。兵士一人一人の生き方、声を、ひとつずつ拾う旅が始まった。

もうひとつの日本（前書き）

済みません。

何も言わないでください。

「兵士に聞け」シリーズのパロディだと思ってください。済みませんでした。

もつひとつの日本

白い波頭を絡め取るように吹き付けてくる二月の風は、寒いという形容詞では不十分、むしろ激痛をともなうものだった。鉛色のまだら模様の空のどこに太陽があるのかわからず、風に混じって頬を指すのは粉雪だ。津軽海峡を通過したのが昨夜。私はいま、北海道・渡島半島沖の日本海にいる。

海は荒れている。いや、寄港した函館の漁師に言わせれば、この程度の波は凧のようなものだという。唇の端にちびた煙草をくわえたごま塩ヒゲの漁師は、私が乗ってきた船を見上げて、「俺の船だつてたいして揺れないんだ。あんたの船なら、台風の中に突っこんだつて平気さ」、そう笑った。

演歌の歌詞に歌われるような漁船では、いま目の前で荒れ狂う波頭を越えるのはたいていではないだろう。函館の漁師は強がって見せたのだ。あるいは、私が乗ってきた船へのやっかみか、皮肉か。確かに、波頭から砕けた海水が甲板に散ることはあっても、私の足許は頼もしくビクともしない。この程度の波は、この船にとって、実際「凧程度」なのかもしれない。

横須賀を出港し、房総半島をぐるりと周り、太平洋を北上、二日かけて辿り着いた日本海に、私が乗る船……第一航空艦隊所属の攻撃型原子力空母「赤城」はいま、さらに北、宗谷海峡を目指している。僚艦にミサイル巡洋艦「妙高」「那智」、ミサイル駆逐艦「雪風」以下数隻を従えた堂々たる艦隊。足の遅い戦艦こそ従えていないが、まさにシーパワー、一級の打撃力を誇る日本海軍の精鋭である。

飛行甲板があわただしくなる。この荒天について、戦闘機が発艦するのだ。スチームカタパルトから漏れ出す蒸気。スポットティングドリーに引かれる艦載機。乗組員たちは若く、そして機敏だ。私は彼らの邪魔にならないよう、広報担当の稲垣少佐に付き従い、しぶ

きをかぶりそうな甲板の端にいた。

「こんな天気でも飛ばすんですか」

私が尋ねると、稲垣少佐は力強くうなずく。

「実戦は待ってくれませんか。敵が躊躇するような場面こそ、私たちにはチャンスなんです」

「事故の危険を冒してでもですか」

「ふだんの訓練どおり、基礎に忠実に、しっかりと行動すれば、事故はありません。むしろ、事故の可能性が身近に感じられるこのような天候の日こそ、スキルアップにつながる現場なんだと私たちは思います」

事実、事故はこうした荒天時には不思議と起こらないという。事故が発生するのは、まさに、乗組員たちが帰港を目前にした平穏な日中、気まぐれな天使がそつと耳許でささやいたかのよう起きてしまう。天使のささやきも、手を下してしまえば悪魔の所業と化す。ヒヤリ、ハットで済めばいいが、ひとつの不注意が、何百億もの戦闘機をがらくたに変え、前途洋々な若い乗組員を棺の中へと閉じこめる。

「松山さん、見てください」

稲垣少佐が指さす方に、カタパルトシャトルへ固定されようとする艦載機があった。

「中西中尉です」

私は、稲垣少佐の言葉に、高まっていくターボファンエンジンの甲高い音がふと、耳から遠ざかっていくような気がした。眼前、といても、安全を配慮してかなりの距離があるのだが、それでも陸上基地で目にする戦闘機よりははるかに近い位置で離陸を待つ戦闘機、そのコクピットに座っているのは、あの中西中尉だ。

中西中尉は、二五歳。「赤城」が寄港した函館市出身、おそらく同年代の女の子が見たならつらやむほどの白い肌をした好青年だ。戦闘機というより、エリート銀行マンか若き医師、そういう風貌をした彼は、実際、高校を卒業するまで、北海道大を目指していた。

といつても、医学部ではなく、工学部。

「父親が、路面電車の整備員なんです。小さい頃から、バラバラになった電車の部品や、それを組み立ててしっかり走る電車を見ていたら、機械っていいなあって」

狭苦しい空母の談話室で話す中西中尉は、しかし私の目をまっすぐ見て話す。その瞳は、やはり、空に生きるパイロットたち共通とも言える、深く澄んだ濃い色をしていた。

中西少尉は普通科の高校に進んだが、機械いじりは半ば趣味として忘れられず、中古のバイクをアルバイトで貯めた金で購入し、「学校には内緒で」いじり倒していた。

「乗るよりもバラバラにする方が好きでしたな」

そんな中西中尉が工学部を目指したのも、「堂々と」機械いじりができるからという理由だった。バイクメーカーや機械メーカーに就職したいと思うよりも、指先の指紋ひとつひとつに機械油が染みこみ、生半可に洗った程度ではその色も匂いも取れないほど、毎日機械に触り続ける日々を続けたいと思ったからだった。

「でも、どうしていま、君は海軍のパイロットなんだろうか？」

私が質問すると、中西中尉は、わかっていますよ、とでも言いたげな表情で小さくうなずくのだ。

高校二年の夏だった。中西中尉は親戚がいる札幌へ遊びに行く。北海道に梅雨はないが、それでもその年は雨が続き、遊びに出かけた札幌の街でも、親戚の家の中で家事を手伝ったり、短い晴れ間に菜園でトマトをかじったりする程度、身体を持てあまし気味だった。そんなとき、札幌からほど近い恵庭に住む他の親類から、航空祭に行かないかと誘われる。それが、中西中尉の転機だった。

「圧倒されました」

当日、雲ひとつもなく晴れ渡った北海道の空は真っ青で、中西中尉は同い年のいとこと連れ立ち、千歳市の空軍基地のゲートをくぐる。千歳に空軍基地があるのは知っていた。しかし、千歳といえば、北海道の空の玄関口、千歳空港があることしか印象になかった。も

とよりバイクや車、あるいは路面電車など、地上を走る乗り物は身近に感じていたものの、飛行機には興味が湧かなかった。そんな中西中尉を圧倒したのが、空軍の八一式戦闘機の機動飛行だった。

「音と、速さでしたね。圧倒されたのは」

紺色を思わせるほどの晴天に、細く鋭いウェイパートルレイルを翼から曳き、アフターバーナーのオレンジ色の炎をノズルから噴き出して飛行する空軍の戦闘機に、十七歳の中西中尉は圧倒されたのだ。轟音とともに滑走路を蹴立てたかと思うとまっすぐに天を目指して上昇していく戦闘機を見上げる中西中尉の首は瞬く間に痛くなる。なんとという上昇力、パワーだろう。会場を高速で駆け抜けていく戦闘機のスピード。信じられないスピードだった。

空軍戦技研究班が見せるアクロバット飛行も美しかったが、中西中尉は、現役戦闘機が見せる驚異的なパワーとスピードに、強烈な憧れを抱いたという。

「まさに、別世界なんです。父が私に見せてくれた路面電車ももちろん機械なんです。路面電車だって、オリンピック選手が走るよりもずっと速く線路の上を走る。けれど、空を飛ぶことはできないわけです。その点、戦闘機はあの圧倒的なパワーとスピードで、自由に空を飛べる」

中西中尉は、なんとも「パワー」「スピード」という言葉を口にする。それは若者らしい感覚なのかもしれない。自分が持つていない超人的な何かに憧れる。それを自分の腕で御してみたい。

航空祭で熱に浮かされたようになってしまった中西中尉は、空軍が会場内に設けていた入隊案内所ですっかりとパンフレットをもらってきた。勧誘担当の士官も中西中尉が高校二年生だと知るや、熱心に空軍パイロットを目指すように勧めてくれた。中西中尉は、北大工学部を目指すよりも、もうすっかり空軍の戦闘機乗りを目指す気になっていた。

「しかし……」

中西中尉と私は、海軍の空母「赤城」の艦内にいる。二千名余の

乗組員がひしめく空母の中に。ここは空軍基地ではない。

「なぜ海軍に、と。それもよく訊かれるんです」

中西中尉は今度こそ、声を立てて笑って見せた。

中西中尉は航空祭から帰って、両親に空軍の戦闘機パイロットを目指したいと口にする。母親は「好きなようにおやり」と素っ気ないが反対もしなかった。父親も、「中途半端な気持ちでないなら」と、賛成もしないが反対もしなかった。中西中尉は次の日から、工学部ではなく、空軍の航空学生と呼ばれるパイロット養成学校受験のための勉強を始める。中西中尉にしてみれば、そのときの学年が高校二年であったことも幸いした。これが高校三年であれば、航空学生を受験日は間近に迫り、準備どころではなかっただろうから、おとなしく北大を目指していただろう。そうした意味でも、やはりあの航空祭は転機だったと思う。しかしそれ以上に転機だったのは、空軍ではなく海軍を選んだきっかけとなった出来事だった。

「あまり威張れた話ではないのですが」

中西中尉はやや声のトーンを下げて続けた。

「海軍に志望を変えたのは、動機が不純なんですよ」

中西中尉が育った函館はいうまでもなく港町である。いまではトンネルの開通で役目が終わったとはいえ、かつては北海道と本州を結ぶ大動脈、青函連絡船がふ頭に並び、いまでも本州と北海道をつなぐフェリーが行き来する港町だ。津軽海峡は日本海と太平洋を隔てる重要海峡であると同時に、日本にとっても安全保障上重要な意味を持つ海峡だ。海軍の艦艇も頻繁に寄港する。高校三年のやはり夏、息抜きのランニングコースに組み入れている港近くで、中西中尉は海軍の士官たちとすれ違った。

「かっこよかったですよ。海軍の制服が」

海軍の制服といえば、クラスメイトの女の子も着ているセーラー服、というイメージが強かった中西中尉だが、すれ違った士官たちは、上下まぶしい真っ白の制服を着ていた。ついランニングのペースを緩め、汗を拭いた中西中尉に、一人の士官が立ち止まり、「気

合いを入れていけ、がんばれよ」、そう声をかけてきた。

「まるでドラマかなにかみたいですね」

中西中尉に、立ち止まり笑顔を向けてきた海軍士官の姿が、たまらなくかつこよく見えたのだ。一年前の航空祭で、中西中尉は、空を圧倒的な「パワー」「スピード」で駆ける戦闘機を見、憧れた。

しかし、あのとき中西中尉は、その戦闘機を操るパイロットを見ていない。パイロットスーツ姿のパイロットを見ていたなら、また海軍士官の印象も変わったかもしれない。

「いや、あの制服にはやられました」

機械いじりと同じくらい、中西中尉は中学、高校と剣道部で竹刀を振るっている。すらりと伸びた背筋にさりげないがしかし機敏な所作、いずれもスマートで訓練されているように見えた。事実、海軍に限らず、軍の士官といえば、厳しい訓練を重ねて部下を束ねる教育を仕込まれているわけだが、港ですれ違った士官たちの立居振舞は、剣道部で礼儀作法をうるさく言われてきた中西中尉の心をつかんでしまったのだ。停泊していた艦艇の無骨だが頼もしい威風堂々とした姿にも、戦闘機とはまた違った憧れを感じたという。

「それで知ったんですよ。海軍にも戦闘機があつて、戦闘機パイロットがいるってことを」

中西中尉は、戦闘機は空軍にしかなく、戦闘機に乗ろうと思つたら空軍にはいるしかないと思つていたので。それは大きな誤解で、空軍ほどの規模ではないが、もちろん海軍にも戦闘機は配備されていて、戦闘機パイロットも大勢いる。そこで中西中尉は、空軍から海軍を目指すことを決意したので。

「父には怒鳴られましたけどね」

空軍から海軍に志望変更したことを事後報告した中西中尉に、父は激しい言葉をぶつけたという。おそらくは、中西中尉の「浮気性」のような心変わりにたいしてだったのだらう。しかし中西中尉は言う。

「根本的な部分は変わらなかつたんです。戦闘機に乗りたいってい

う

事実、中西中尉はいま、海軍の主力戦闘機、74式戦闘機のパイロットとして操縦桿を握る。戦闘機を降りれば、あの夏の日にすれ違った士官たちと同じ、白い制服の袖に腕を通す。

「まだ頼りないと思いますが」

制服姿を見せてくれた中西中尉は、あの夏の日の上官たちの姿を思い出すにつけ、まだ自分の姿勢がおよばないことに歯がゆさを感じる。けれど、近づこうとは思う。いつの日か、自分も同じように街であるいは港で、高校生だった自分に毅然とした笑顔を向けられるように。

中西中尉がコクピットに座る74式戦闘機は、風上に舳先を立てる空母「赤城」の飛行甲板にいて、いままさに、真冬の空へ打ち上げられようとしている。

私の頬をいまだ、細かい氷の粒のような雪が刺す。空母は静止しているわけではなく、風上へ向かって全速力で航行しているのだ。戦闘機の離発艦に合わせ、合成風力を作り出すためだ。三〇ノット強、時速にして五十キロ以上。ボアのついたコートを着ていても寒い。

中西中尉の74式戦闘機がエンジンの回転をあげる。排気管からオレンジ色のアフターバーナーの炎が見える。轟音。次の瞬間、圧倒的な「パワー」で離陸滑走を開始する。滑走と呼ぶにはあまりにも距離が短い。数秒で離陸速度に達した74式戦闘機は、圧倒的な「スピード」で、冬空を駆け上がっていく。

僚艦を従えた空母「赤城」は、さらに極寒の宗谷海峡、樺太沖を目指して進む。

対空戦闘、用意！

対空戦闘用意

「対空戦闘用意！」

スピーカーから鋭く発せられた号令に、艦内のクルーの顔色が変わった。私は広報担当の稲垣少佐と、ふだんはなかなか取材許可の下りない、戦闘指揮所でその号令を聞いた。

私がいまいるのは、「世界最大最強」の誉れも高く、戦艦の代名詞とも言つべき、「大和」の戦闘指揮所「CIC」だ。建造されてから半世紀を過ぎ、さすがの戦艦「大和」も、戦うべき相手はすでに大洋になく、毎年永田町で審議される予算委員会という状況にさらされて久しい。そして、艦長以下の幹部たちが、天守閣と見まごう艦橋で指揮を執らず、何度目かの大改装で新設された、窓ひとつない戦闘指揮所から戦況を窺い、「神の眼」とも言われる早期警戒機やミサイル巡洋艦から伝送されるレーダー情報を、宇宙船のコクピットを思わせる巨大ディスプレイに表示させ、一秒ごとに変革していく「戦場」をじつと見つめるようになっていく。

「目標、二〇マイル」

戦闘指揮所に、目標の諸元が次々とコールされてくる中で、薄暗いコンソールの前にじつと腕組みをしているのは、大崎中佐である。短く刈り込んだ髪と、赤銅色の肌は、まさしく「海の男」そのものといった風情であるが、艦を降り、ともにテーブルを囲んだ居酒屋の席で、意外なことを告白した。

「私ね、下戸なんですよ」

大崎中佐の眼前のジョッキになみなみと注がれているのは、サイダーだった。

「ビールも飲めないし、焼酎もダメ。ウイスキーも匂いすらダメだし、日本酒は料理の隠し味ならいいけれど、飲むなんてもつてのほ

かですよ」

笑いながら、一気にサイダーのジョッキを傾け、半分ほどがなくなつた。

「ある意味、これも海軍の伝統ですから」

半世紀前、海軍の主な戦艦や巡洋艦には、ラムネの製造器が配備され、艦内で飲むことができたという、そのことを大崎中佐は言っているのだ。

「酔うのは、船酔いだけで十分でしたねえ」

サイダーはカロリーも糖分も高いからと、それでもなみなみと注がれたジョッキを空けて、しかしその後、大崎中佐は烏龍茶を飲んでた。赤銅色の肌を見ていると、すっかり酒に酔っているように見えるのだが、それを指摘すると、

「都合がいいんですよ、この色。無理に飲まされずに済みますからね」

若い頃は、酒の席でずいぶん苦勞をしたのだという。飲めない者は飲めないなりに、酒の席での防御策を次々と考えたとのこと。たとえば、

「ジンジャーエールってありますよね。色といい泡の具合といい、なんとなく酒を飲んでるように見えるんですよ。若い頃はそれでよくごまかしていましたね」

いまでは、大崎中佐が酒に弱いことを知っている人間が多いので、苦勞することもなくなつた。

「酔うのは苦手なんです。海軍に入り立ての頃は、カッターに乗っついても駆逐艦に乗っついても、とにかく酔いましたから」

それも意外な言葉だった。海に憧れ、船に乗りたくて海軍に入つたような人が多いと私は思っていた。だからなおさら、船酔いする人間が海軍にいることが信じられない。

「案外多いですよ。ようは慣れなんです。船酔いを治すには、船を降りるしかない、なんて言われますけど、慣れてしまえばどうつてことないです。それに、船に酔うつてことは、船の動き、海面の

動きにそれだけ敏感だったことです。船乗りとして、これは一種の適性だと私は思うことにしたんですよ」

それは、私が以前取材した、空軍のとある戦闘機乗りの言葉と重なって聞こえた。旧式の戦闘機に乗り、最新鋭の戦闘機を相手に互角の戦いを演じ、演習とはいえ、「敵」の最新鋭戦闘機を「撃墜」してしまふほどのエースパイロットである彼もまた、空軍でパイロット見習いをしていた頃は、ひどい飛行機酔いに悩まされたというのだ。それ彼もまた「飛行機の動きに敏感なんですよ。そう思うことにしました。実際、飛行機に無理な動きをさせないで、自然な振る舞いを心がけると、酔わないんですよ」と私に話してくれた。無理をするから酔うのだ、と。

「船がおかしな動きをしていると、いまでも具合が悪くなりますね。それに、あの真つ暗なCICにこもっていると、余計ね」

かつて艦長以下、艦の幹部たちは、見通しの利き見晴らしもよい艦橋で指揮を執っていた。世界最大の口径を誇るこの戦艦「大和」の46センチ砲の砲撃も、より高所からの測距が必要だったから、13階建てのビルに相当する艦橋に上がらなければならなかったのだ。

しかし、現代の戦闘はそれを変えてしまった。「大和」が艦尾に積んでいた観測機は役目を終え、高性能なレーダーや、無人観測機や偵察機、果ては人工衛星の情報を駆使して戦闘を行う。艦橋から見える水平線はたかだか十数キロ程度だが、航空機や人工衛星は、地球の丸みのその向こう側、数百キロ、数千キロ彼方まで見通してしまう。艦橋で指揮を執る必要性が全くなってしまうのだ。

もちろん、通常の航行時には、見通しの利く艦橋は重要だ。往來の多い海路を行くときは、周囲の艦船の動きに随時注意しなければならぬ。戦闘行動をとらないふだんの「大和」の艦橋には、航海長をはじめ、艦長以下が双眼鏡を首から提げ、伝統的な海軍士官の雰囲気を守っている。が、戦闘時は違うのだ。

違う、たとえば、大崎中佐の預かる「大和」の武器も変わった。

戦艦の武器が、9門の46センチ砲であることは疑いがない。戦艦の存在意義は、まさにこの主砲の攻撃力、打撃力にある。ミサイルが発達し、百発百中の命中率を誇っても、自重一トンを超える46センチ砲の砲弾の威力は、自軍の兵士たちをも畏れを持っている。

「演習時に撃つわけです。主砲を」

大崎中佐も、主砲一斉砲撃の衝撃は、何度経験しても慣れることはない、という。

「そうそう気軽にぶっ放せる代物ではないわけです」

最大射程は四十キロを超える。東京は台場あたりら砲撃すれば、世田谷や中野、もちろん新宿も射程圏内に入ってしまう。もちろん、射程数百キロにも達する現代の巡航ミサイルに比べれば心許ない射程だが、しかし、破壊力が違いすぎる。

「敵に回したくないですよ。この船は。もともとは敵の戦艦を水上でやつつけてしまおうって思想で作られてますけど、地上目標にたいする攻撃力もすさまじい」

大崎中佐が言うように、航空機が発達し始めた1940年代以降、それはこの「大和」が誕生した時代に当たるのだが、そのあたりの時代から、戦艦の主砲は、味方の上陸部隊を支援するために効果的であると言われ、戦艦の主な役目は、航空機による初期作戦を経て、上陸支援のためにその強力な火力を十分に使用する、そういう方向に向かっていった。

「大和」には姉妹艦があと三隻いた。生まれた順に、「大和」「武蔵」「信濃」「紀伊」であり、いまでも現役なのは、「大和」と「信濃」の二隻だけである。

1950年代に一時四隻すべてが退役したが、朝鮮動乱の勃発で全艦復帰、インドシナ動乱での活躍後、「武蔵」と「紀伊」が退役した。「武蔵」は横須賀で、「紀伊」は舞鶴で記念館として保存されている。

対空ミサイルの装備や高性能レーダーの追加、ヘリコプターの装備などの近代化改修を受けた「大和」「信濃」は、日本海軍の顔と

して、海外への親善航海も幾度も経験した。国内での知名度は、「武蔵」「紀伊」より先駆けて退役した戦艦「長門」や「陸奥」をも凌いでいたし、「世界最大・最強」の戦艦として、海外での人気も高い。しかし、海軍の戦闘能力の大部分を、いまは空母を中心とする機動部隊が担い、艦隊を守るのは艦載機とミサイル巡洋艦である。「いまでは時代遅れなのかな、とも思いますが、それでも、『大和』の砲撃を見たら、恐ろしいと思うはずですよ」

「大和」が実際の戦闘で主砲から火を吹いたのは、1950年代の朝鮮動乱、60年代のインドシナ動乱と二度あるが、「想像力は敵の銃弾よりも強力だ」とその洞察力で戦場のドキュメントをつづった開高健は、「帝国海軍が誇る戦艦『大和』がベトナム沖に現れたとの情報に、ベトナムの兵士たちはみな震え上がった。やがて、観測機が飛んでくるだけで、獰猛な兵士たちも逃げ出すようになった」と書いている。

しかし、世は移ろっていく。

CICでディスプレイを瞬きすらせず凝視する大崎中佐がいま司るのは、ベトコンを震え上がらせた主砲ではなく、対空砲……対空機関砲と、艦対空ミサイルである。

上陸支援や敵水上部隊への打撃力では相当な威力を発する「大和」の主砲も、マツハの速度で飛来する戦闘機には無力である。「大和」建造当時に開発された対空兵器「三式弾」も有能な武器だと信じられたが、実際は戦闘機が向上し、防御力が上がると、さほどの威力がないことがわかってしまった。

時代の趨勢は、かつて「花形」だった戦艦ではなく、軽快な機動力と強力なリーダーを武器にするミサイル駆逐艦やミサイル巡洋艦が海軍の主力と扱われるようになった。もちろん、戦艦の「天敵」とも言える戦闘機を操る空母でもある。

空からの脅威にたいして防御力が弱いのは、戦艦も空母も同じである。しかし、空母が自前の戦闘機や早期警戒機を飛ばして自らを守るのにたいし、戦艦は、対空機関砲やミサイルでハリネズミのよ

うに武装するしかない。艦隊を守ることもできない。大崎中佐に失礼を承知で言ってしまうえば、戦艦はもう時代遅れなのである。

「対空戦闘は、がっかりされるかも知れませんが」

広報の稲垣少佐は、私を「大和」のCICに案内する道すがら、申し訳なさそうに言ったものだ。

「なぜですか？」

「松山さんは、戦艦と聞くと、何を想像しますか？」

やはり、その勇姿になくってはならない、主砲である。

「対空戦闘で、主砲はなにもしません。何もできないのです。主役は、これです」

稲垣少佐が指さしたのは、六本の砲身を束ね、寸胴で巨大なレーダーを頭に載せた、「CIWS」と呼ばれる対空機関砲だった。アメリカから導入された防衛兵器だ。

「あとは、対空ミサイルです。対空戦闘の主役は、やはりミサイル巡洋艦か、そうでなければ、空母艦載機なんですよ」

自らも戦艦「信濃」に短時期乗っていたという稲垣少佐は、少々寂しそうに主砲を見上げた。彼も、戦艦の主砲一斉砲撃で衝撃を受けた一人だという。

対空戦闘訓練は、あつという間に終わってしまった。ダメージコントロールの訓練も兼ねており、「大和」は敵攻撃機の放った対艦ミサイルが二発命中、甚大な被害が出たとの想定になっていた。

大崎中佐は、訓練が終わっても、じつとディスプレイを睨んでいた。

その姿は、退役の時がすぐそこに迫っていることを知りながらも退けずにいる、戦艦「大和」の姿そのものに見えないこともないのであった。

撮影禁止

たとして言うなら、コンクリートの巨大トンネルである。

「掩体」と呼ぶか、「シエルター」と呼ぶか。部隊ではふつつ、この巨大なコンクリート製のトンネルを、「掩体」と呼んでいる。

八月の北海道である。空は恐ろしいほど青く晴れ渡り、そよぐ風には、芳香剤のような濃い緑の香りが混じり、囀る野鳥は誘導路脇の雑木林の枝で、その向こうにじつとしなやかな肢体を見せる、金属製の猛禽を眺めているに違いない。

千歳は、北海道の空の玄関口であり、北海道を訪れる観光客のほとんどは空路、北の大地に建設された大空港 - 千歳空港に第一歩を記す。が、千歳空港は、観光客やビジネス客でごった返すターミナルビルと滑走路をはさんで、国内有数の空軍基地が併設されている。それが、いま私がいる第二航空団・千歳基地である。

私がいるのは、隊員たちが「掩体地区」と呼ぶ区画で、基地に勤める隊員でも、容易に立ち入ることができない、いわば「軍事機密」に守られた区域だ。もっとも、束の間の札幌出張にふと気張った背中から力を抜き、ターミナルビルの大きな窓から晴れ渡った北海道の真夏の空を見上げ、遠くにそびえ立つ恵庭岳や樽前山の威容、手つかずの原生林を眺めていると、ふとこのコンクリート製のアーチ橋のような、トンネルのような構造物が眼に入るかも知れない。

日本の空軍基地は概して無断撮影が禁止である。広く国民に親しみを持ってもらおうと年に一回開催される基地開庁祭などのイベントでは、展示される航空機の写真撮影こそ許可されるものの、立入禁止区域や軍が規制する建物、施設の写真撮影は絶対禁止である。今回の取材でも、私を含め、カメラマンの簗島さんも、それは空軍側から厳重に言い渡されている。

しかし、撮影禁止は空軍施設の中だけで、中島飛行機やボーイング、エアロスパシアルといった民間旅客機がひっきりなしに離着陸

するターミナルでは、旅の思い出ばかり、カメラを取り出していくら写真を撮ろうが、空港職員が目くじらを立てることもない。警備員が巡回していても、北米大陸へ燃料と乗客を満載してタキシングを開始した中島・G30Nをファインダーに収めたところで、それは出発デッキのありふれた一コマに過ぎないだろう。だから、ターミナルから千歳基地を向き、原生林の中に点在するこのコンクリート製の「掩体」をいくら撮影したところで、誰も気付かない。

掩体は、まさにトンネルのように貫かれており、出入口にあたる側には、頑丈そうな鋼鉄製の扉がつけられている。これは万一、千歳基地が敵の爆撃に遭遇したとき、この扉を閉めておけば、中に仕舞われる戦闘機を守るためのものだ。当然、この扉の厚みも軍事機密ということになる。そして、軍が写真撮影を絶対禁止としているこの構造物は、緑溢れる豊かな大地、北海道を空から守るための戦闘機を格納するためのものなのである。

私が千歳基地を訪れた日は、八月の第一日曜日を翌日に控えた土曜だった。基地は通常、土日は緊急要員と待機要員を残して全休となるが、この日は違った。明日の日曜は、年に一度の千歳基地の「祭」、航空祭の日に当たっていた。私はなにもこの日をめぐって取材したわけではなかったのだが、数万人が訪れる行事に際して、私は「関係者」扱いとなり、一般公開の前日に、隊員たちの家族を対象に開かれる、「もうひとつの」航空祭を見学できることになったのだ。

午前、基地司令や千歳市長のあいさつ、訓辞が一通り述べられたあと、空軍が保有する戦闘機や攻撃機が会場上空をゆっくりと飛行し、航空祭が幕を開ける。といっても、会場には隊員の家族など、ごく少数の関係者しかいないから、翌日日曜日の「本番」の人出を思えば、まさに「贅沢」そのものといったところだろう。事実、空軍戦闘機がそのパワーとスピードを存分に発揮してみせる機動飛行や、回転翼機による救難訓練展示、海軍は空母艦載機によるデモンストレーション、果ては遠く浜松からやってきた戦技研究班、いわ

ゆるアクロバットチームの華麗な飛行まで、私は人混みにまぎれることなく、特等席から眺めることができた。世の航空機ファンたちには、申し訳なくてなかなか口にできないほどの贅沢な時間を過ごしたのだが、隊員たちもまた、この日は一年に一度の「お祭」のようなのである。

「写真撮影は、本当に、絶対に禁止ですから」

基地の案内役、小高准尉は、掩体地区に向かう私たちに何度もそう念を押した。

「わかっていきますよ。掩体地区は、最高の軍事機密なんですよ」
幾分茶化した口調で私が言うと、

「いえ、それはもちろんですが、これから見聞きすることは、本当に、他言は無用で」

小高准尉は、私たちを「オープンカー」で迎えに来てくれた。戦闘機を牽引するトーイングカーである。カメラマンの簀島さん、そして私に小高准尉の三人は、やや定員オーバー気味なのを承知で、簀島さんは車外に落ちないよう懸命に捕まりながら、くねくねと曲がる誘導路を、掩体地区へと向かった。

千歳基地には戦闘飛行隊がふたつ配備されている。どちらも「北の空の護り」の要、空軍では「最新鋭」とされる八一式戦闘機を四十機近く保有する。千歳基地の戦闘機部隊は、札幌や小樽などの重要都市はもちろん、苫小牧や室蘭といった工業地帯、まさしく北海道全域をカバーする。千島列島は択捉空港、樺太にも豊原空港に戦闘機部隊が駐留しているが、むしろそちらはいわば「営業所」のような存在であり、ここ千歳基地が、北部航空方面軍の主力として位置づけられているのだ。

小高准尉が運転するオープンカーは、時速にして三十キロ程度のスピードで誘導路を行く。灌木が茂り、ところどころから誘導路が滑走路に伸びており、離陸していく旅客機の姿も見える。遮るものがなにもないため、強い陽射しに私は半分めまいを覚えていた。

「もうすぐですから」

小高准尉は、アクセルペダルからそつと右足を浮かせた。

「これが掩体地区ですか」

私はオープンカーから滑り落ちないようにしながら、「最高軍事機密」である掩体を、ようやく目の当たりにした。

一言でいうなら、「秘密基地」。

私が最初に抱いた感想はそれである。

何より、写真撮影を厳禁され、基地に働く隊員ですら容易に立ち入れず、「最新鋭」戦闘機がここで翼を休めているはずなのだ。見えてきた掩体地区には人影も少なく、夏の陽射しにコンクリート製の掩体そのもの、誘導路が照らされて白く輝いており、雰囲気はまさしく、映画などで見る「秘密基地」そのものであった。

「こちらです」

小高准尉は誘導路から駐機場の片隅にオープンカーを止め、私たちを誘う。

「これが、八一式戦ですね」

指さした先には、掩体の中、夏の陽射しから逃れるようにして翼を休めている灰白色の猛禽……一機八十億円は下らないスーパーマシン、八一式戦闘機がしつかり車止めをされて格納されている。掩体に入ると、ひんやりと涼しく、それが心地よい。

「ご覧になりますか」

以前、私は三重県の明野を訪れた際、間近でこの八一式戦闘機を見た。いや、見るだけではなく、教育部隊を勤めている明野基地の学生たちに混じるようにして、コクピットに座ったりもした。が、千歳で再会したこの戦闘機は、幾分雰囲気異なって見えるように思えたのだ。

「実弾、積んでいるんですか」

私が指摘をすると、小高准尉は小さく笑ってそれを否定した。

「あれは模擬弾ですね」

今日は基地の「お祭」である。パイロットや整備員の家族に見せるため、模擬弾を装備させているのだという。それでも間近に寄る

と、対空機関砲のあたりがすすすけていたり、主翼や胴体も、洗い流しても落ちないのか、黒っぽい汚れが染みになっていて、かえってそれは、歴戦の勇者の証であるような、一種のすごみとして感じられるのだ。それが、明野基地で接した戦闘機と、千歳の機体の違いなのではないかと思われた。ここは教育部隊ではなく、まぎれもない実戦部隊、大国・ソ連を望む前線基地なのである。

小高准尉は、ガイドよろしく、模擬弾を装備した八一式戦闘機をくまなく説明してくれた。同時期にアメリカが配備したF15戦闘機と機体規模や姿形も似ているが、残念ながらエンジン性能が米軍機には追いついていないこと。しかし、模擬戦では今のところ五分五分であるということ。むしろ、機体の性能でおよばない部分は、パイロットの技量と努力で補っているということ。海軍の七四式艦戦には負け知らずであること。

まだ若い小高准尉は、自分の部隊の自慢話を、まるで自分の恋人や親友を紹介するように話してくれる。説明されるほとんどの内容をすでに知識として知っている私も、小高准尉の「熱さ」に気圧されるように、黙って聞いていた。簗島さんは、彼に断ってから、熱っぽく期待の説明をする小高准尉の姿をファインダーに収め、数枚シャッターを切っていた。

「では、次に行きましょう。パイロットを紹介します」

小高准尉と私たちは、「説明用」の八一式戦闘機から離れ、ふたたび炎天下の誘導路を歩き始めた。

「重ねて言いますが、くれぐれも、掩体や誘導路の配置がわかるような写真は撮らないでください」

「大丈夫です」

「それと、これから行く場所について、私が許可した部分以外は、全面的に撮影は禁止です。よろしいですか」

小高准尉がいやにしつこく撮影禁止と繰り返すのを、私と簗島さんは少々不思議に感じていた。以前取材した戦艦「大和」の艦内では、海軍の広報官は、そこまですなくても、というくらい写真撮影

を勧めてくれた。いまにして思うと、戦艦の写真を私たちに撮らせ、発表させることで、「時代遅れ」「税金の無駄遣い」「大艦無能主義」などと揶揄される戦艦の有用性を世に知らしめたかったのかと思っが、しかし、「軍事機密」の塊であるはずのミサイル巡洋艦「妙高」の取材の際、一部の撮影は禁止されたが、小高准尉ほどしっかりと「撮影禁止」を繰り返す担当はいなかった。

誘導路は掩体を縫うように、原生林の中を行く。実際たいした距離ではないのだろうが、距離感や方向感覚を狂わされているようで私は首筋をじりじりと灼く陽射しに痛みを感じながら、それでも吹き抜ける風の涼しさに、ここが北海道であることをあらためて思っていたのだ。

私は帝都・東京の生まれであり、地方というものを知らずに育った。北海道という地域には少なからず憧れを抱いてはいた。なににより広く、四季がはつきりとしており、学校で学ぶ北海道は、日本の食糧基地であり、観光ガイドを開けば、青い空に緑の草原、霧の摩周湖、釧路の海産物、札幌の「ジンギスカン」料理……。今回の取材で北海道は三度目になる。しかし前回は空母「赤城」が真冬の訓練で樺太を目指す折、函館港に寄港したのみで、三度目の今回は、学生時代以来久しぶりの来道、ということになる。取材の合間に、北海道の食材をいかにこの腹へおさめてやろうかと簗島さんとホテルで話し合うこともしばしばだった。そんな妄想に近い思いをずっと取材中も秘めていたからか、誘導路を歩く私の鼻腔に、その「ジンギスカン」、羊肉を材料とする焼き肉の匂いが漂いだしたのだ。

航空祭はまさに「祭」である。明日の「本番」には、千歳市内からだけでなく、札幌や空路訪れる見物客を目当てにした出店も多数現れる。今日もいくつかの店が、香ばしい匂いをあたりに漂わせていたが、ここは会場からやや離れた掩体地区である。ここまで屋台の匂いが届くはずもない。私はいよいよ自分の食欲の強さにあきれ、首を緩やかに降りながら小高准尉のあとを追ったのだが、やがて誘導路の角を曲がると、あたりには煙が漂っているのである。

軍事基地で煙りといえば、それは火薬の煙と相場は決まっている。「こちらです、松山さん」

パイロットがいるという場所。しかし煙はまさに小高准尉が私たちを誘う掩体から漂っているのだ。

「小高さん？」

「松山さん、ですから、撮影禁止なんですよ」

掩体には、濃いグリーンの作業服を着た整備員たちが多数詰めていた。その姿だけ見れば、格納されている八一式戦闘機の整備だ。が、誰一人戦闘機の機体に触れていない。ただ、煙だけが漂っている。ウイングマークを胸に誇らしげにつけているパイロットもいる。そんな彼らはみな笑顔で、腕をまくり、軍手をはめ、ドラム缶を半分に分った手製の巨大コンロに火ばさみを突っこんでいる。

「まあ、一緒にどうですか。毎年、航空祭の日は、ここで焼き肉なんですよ」

それでも一応はみな軍人であり、職場である。手にしているのはビールではなく、サイダーやお茶が注がれたコップである。そして、整備員やパイロットたちの輪の中心にあるのは、もうもうと煙を上げる焼き肉なのである。

「こちらは、山崎中尉。午前中の機動飛行、ええと、二番機の担当ですね」

「初めまして。山崎です」

満面の笑みと、深い色を湛えた瞳。コクピットではさぞ窮屈に違いない長身の山崎中尉は、私と握手する右手を差し出す際、肉が山盛りになった皿を簡易テーブルに置くのを忘れなかったのである。「くれぐれも、『戦闘機と焼き肉』なんて写真、発表しないでくださいね」

山崎中尉が、そつと簀島さんのニコンを指さして微笑んだ。

簀島さんはニコンをカメラバッグにしまうが早く、別のパイロットがすかさず渡してよこした紙皿に焼きたてのジンギスカン肉を乗せ、慌ただしくそれをほおばったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0040h/>

兵士と見ろ

2010年10月9日02時38分発行